

銚子市立病院

# 銚子市立病院

## 特別対談 白濱龍興理事長 & 落合武徳理事

2010年5月に診療再開した当初は、月に196人だった外来患者数が昨年8月には4,000人を超えた。毎月の入院患者数も延べ400人に達し、救急患者の受け入れも始まっている。こうして病院機能が順調に拡大する中、昨年11月に、白濱龍興理事長と千葉大学で同期だった盟友・落合武徳医師が理事および外科の非常勤医師として就任し、診療面だけでなく、運営面における相談役としても大きな力となっている。お2人に落合理事就任の経緯と今後の病院再生ビジョンを伺った。



### 「救急の受け入れ開始。再生の軸として縦の地域連携に期待」

白濱 龍興氏  
医療法人財団 銚子市立病院再生機構理事長

1966年千葉大学医学部卒、元自衛隊中央病院院長、2010年銚子市立病院院長を経て現職。NPO法人国際緊急医療・衛生支援機構理事長も務める災害医療のエキスパートでもある。

サブライズ訪問から  
新たな展開が始まった

——白濱理事長は、かねてより、理事長を補佐できるマネジメント能力にも長けた医師の参加を熱望されていました。落合先生には白濱先生から声をかけられたのですか？

白濱 いや、昨年の10月末に、落合君が突然、サブライズの訪ねてきてくれました。まさに、再開から一年半が経過する中で、日々の業務に追われつつ、今後、どのように体制を整えていこうか模索していたところに、彼が現れたのです。

落合 千葉大学を卒業後、白濱君は自衛隊中央病院に行き、私は千葉大学大学院から千葉大学第二外科へと進みました。同じ医者でも目指すものが違うこともあり、それほど頻繁に連絡をとっていたわけではありません。また、その後、私は千葉大学の外科の教授として、千葉県内の病院に外科医を派遣する責任者を務めました。銚子市立病院は他大学から派遣されていたので、千葉大学とは無関係でした。

ただ、新聞報道などで銚子市立病院が閉鎖されたのは知っていましたし、再開した病院に白濱君が責任者として勤務しているという話も、医師仲間から聞いて知っていました。

そこで、苦労話でも聞いてあげようかと思いいきなり訪ねてみました。

——その後、落合先生が理事・非常勤医師に就任された経緯は？

白濱 話が出たのはその日のうちです。銚子の医療の現状などを話しているうちに、「手伝おうか」と言ってくれて。最初は「まさか」と思いましたが、渡りに舟ではありませんが、すぐにお願いました。

落合 日本には医師不足で、医療過疎の地域はいくつもあります。ただ、銚子の場合は、この銚子市立病院が経済的・政治的な案件の対象となつて閉鎖されたことで、人為的に市民の医療が阻害された部分があります。そこで、いままで千葉県の医療にかかわってきた想いもあり、銚子市民に本来の医療を提供するために、なにかお手伝いができるのではと思つたのです。いわば、医師としての職業的使命感です。

白濱 そこで、まずは週1回、月曜日に来てくれるよう頼みました。落合 たとえ週1回でも、そこから新しい風を吹き込めればと思つています。また、銚子市民に必要とされるならば、いつでも来るつもりです。

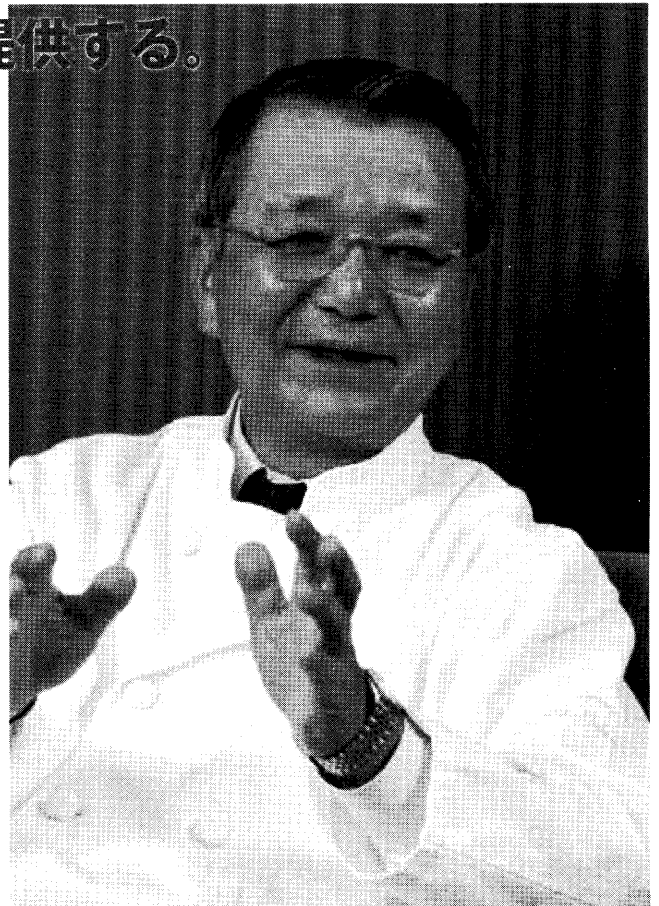
#### 手術再開に向け 着々と進む環境整備

白濱 実際、落合君に来てもらうこ

# 「銚子市民に“本来の医療”を提供する。 それが医師としての使命」

落合 武徳氏  
千葉大学医学部名誉教授  
医療法人財団 銚子市立病院再生機構理事・非常勤医師

1966年千葉大学医学部卒、67年4月千葉大学大学院入学(第二外科)。アメリカ合衆国(Naval Medical Center, State University of New York Brooklyn)とイギリス留学(Cambridge大学外科)を経て、85年10月千葉大学医学部第二外科講師。91年10月同助教授。98年10月同教授(現在の千葉大学大学院医学研究院先端応用外科学)。2007年3月定年により退職。専門領域は消化器外科、臓器移植外科、がん免疫療法、がん遺伝子治療、拒絶反応抑制法などで、先端医療のバイオニアとして新領域を開拓してきた。



とによって、手術室の整備や救急患者の受け入れ、地域連携など、病院の運営面でこれまで課題となっていたことが進むようになりました。

落合 昨年12月には、手術室整備の第一歩として、私と看護部長、外科の看護師と市の担当者、整備の専門家で手術室を見て回りました。

白濱 閉鎖期間を含めて約3年間稼働していなかったため、空調や水回りなど、細菌や水質などの基準をクリアするためには、徹底した整備が必要となります。

落合 麻酔器はじめ機器の点検も行ってました。実は、閉鎖前に当院で働いていた外科の看護師さんたちが戻

つてきており、彼女たちの存在は心強いです。機器なども実際に知っていますからね。

——手術が再開される日も近いのでしょうか？

白濱 11年度末までには、と思っています。

落合 そのためには手術室の整備と同時に、外来で患者さんをきちんと診て、「銚子市立病院の医師は親切だな」「ここで手術を受けたいな」と患者さんに思ってもらえるような信頼を得ることが第一です。

——そうした信頼を得るためには？

落合 医師やスタッフが、患者さんの状況を理解し、病気の苦しみを分かち合うことです。そして、患者さんが、病気だけでなく「気持ちも救われた」と思うような医療を行ってあげれば、自然と患者さんの信頼を得られるでしょう。

——外科の手術は落合先生1人がされるのですか。

落合 私の専門は消化器がんです。現在、整形外科の医師はいますが、それ以外の手術の場合、他から応援の外科医に来てもらう体制を作りつつあります。

白濱 医療において、特に外科においては医師の手配が重要になります。落合君の非常に広い人脈を活かしていただけるかと期待しています。

いよいよ動き出した救急患者の受け入れ

——昨年12月から救急も開始されました。

白濱 まさに多くの人が待ち望んでいたことが、いよいよ動き出した感があります。第一号の患者さんは点滴を受けて帰りましたが、これまでは、そうした軽症の患者さんまで救命救急センターに運ばれるという地域の現状がありました。

落合 先日調べたのですが、銚子市では救急車による救急患者搬送のうち、市外の医療機関に運ばれる患者さんの数が多いという現状を是正する必要があります。

——銚子市民の要望も、救急患者の受け入れが一番と伺っています。

白濱 当院は現状、二次救急に対応できる状況にはありません。当面、高度な医療機関に行くほどでもないが、地域の診療所では対応しきれない患者さんを受け入れていく予定です。当院で診られないと判断すれば、至近距離にある旭中央病院に転送するよう連携をとります。そして、救命救急後の亜急性期を当院で担い、その後、地域の開業医さんに戻していくという縦の連携が、今後の再生の軸になっていくものと期待しています。

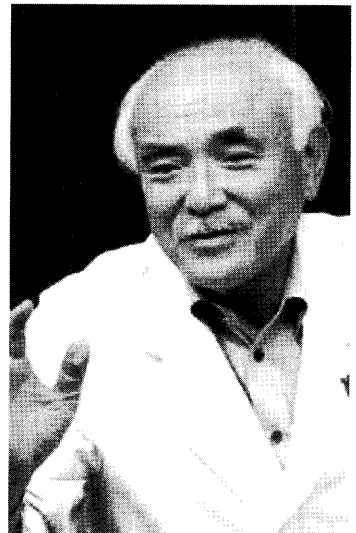


2011年11月に落合武徳氏を理事に、2012年6月に田中基幹氏を副院長にそれぞれ迎えた銚子市立病院。白濱龍興理事長兼院長との3人体制が整ったいま、「再興への道筋」はどのように描かれているのか。新経営陣が同院の近未来を展望する。

## 銚子市立病院

・特別鼎談

# もう後戻りはできない! 新経営陣が語る再興への新たな道筋



**白濱 龍興 氏**

医療法人財団 銚子市立病院再生機構理事長

1966年千葉大学医学部卒、元自衛隊中央病院院長、2010年銚子市立病院院長を経て現職。NPO法人国際緊急医療・衛生支援機構理事長も務める災害医療のエキスパートでもある。

病院を盛り上げていきたい！  
高まる職員の意識

白濱 2010年5月の診療再開から2年余り、ときには院長を兼務しながら、外来診療、病棟回診、対外的な仕事まで、1人で担わねばならなかった時期もありました。そんな私にとって、2人の就任は本当に心強いものです。私が不在のときでも、しっかりと病院を守ってくれる人材を得たことは、市民の皆さんの安心にもつながる大きな前進です。

本格稼働に至った医療連携室、間もなく始まる夜間救急の受け入れ、続く手術室再開、療養型病床のオープンなど、今後も再興に向けたさまざまな取り組みを予定していますので、気を抜かず、力を合わせて確実に進めていきたいと思っています。

田中 私は就任当日からずっと外来診療を担当させていただいているのですが、初日からこれまで連日多く

の患者さんが受診してくださり、市民の皆さんの期待の大きさを感じています。また、「病院を支えよう、盛り上げていこう」という職員の皆さんの意識が想像以上に高いことを実感できたのはうれしいですね。私自身も、ここで頑張っていこうという気持ちが強まっています。

白濱 田中先生が来られた日は、ちょうどオーダーリングシステムが稼働し始めた日でした。このシステム導入にあたっては院内で何度も勉強会を重ね、スムーズな移行を目指してきましたので、大きな混乱はありませんでした。

このように1つひとつの取り組みを職員同士協力して進めていくことは、職場の結束という意味でもとても大事だと感じています。

大学との人的交流、  
地域連携も本格化

白濱 落合先生は千葉大学医学部で

臓器移植など先進医療を牽引してこられた著名な外科医であり、田中先生はアメリカのMDアンダーソンがんセンターなどで研究実績を重ねつつ臨床も両立されてきたエネルギーシユな泌尿器科医です。2人の存在は、新たな医師獲得の呼び水にもなり得るものと思います。

落合 私が銚子市立病院で仕事をしているということは、大学でもちょっとした話題になっているようです。当院と千葉大学医学部は、同じ千葉県下にありながら、これまでほとんど接点がなかったのですが、私を介して少なくとも縁ができ、大学の職員が銚子に目を向けてくれるようになったのはよかったです。

間もなく始まる夜間救急では私の後輩の若手医師を助っ人に呼んでいまし、今後も徐々にこうした人材交流を進めていけたらと思います。もちろん、大学だけでなく近隣病院との人的交流も呼びかけていきたいですね。医師不足の現状のなかでは「地域で医師を共有する」といった視点が必要ではないでしょうか。

白濱 落合先生は私の同級生でもあり、病院運営の点でも忌憚のない意見の確かな指摘をしてくれるので助かっています。

落合 私が常々感じているのは、病院とは1つの有機体である、という

ことです。医師だけでなく、看護師をはじめとしたさまざまな医療職から事務職まで、すべての人材がしっかりと協働しなければ病院は成り立ちません。その意味では、職員の交流の場を意図的につくるなど、組織の醸成のための取り組みももっと行っていくべきでしょう。

もう一つ、非常に大事なのが、この病院の再生・再興の最大の目的は地域医療の復興であるという点です。この目的を果たすためにはもっともっと連携を進めなければなりません。白濱 地域連携については診療再開当初から、私自ら近隣病院の院長などに面会し、打ち合わせを進めてきており、すでに個々の患者さんを段階的に引き継ぐ医療連携を実現しています。

診療所然としていた1年目より病棟再開を果たした2年目、そしてその2年目より現在と、当院の病院としての機能は確実に高まっています。

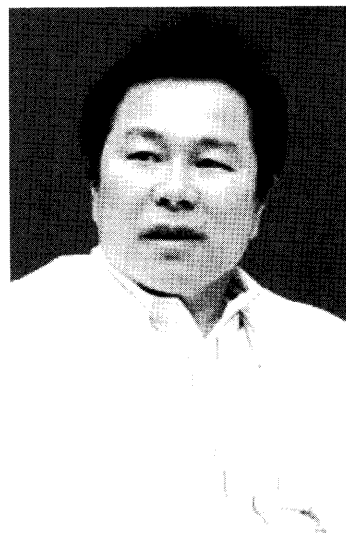
それを理解してくださる近隣医療機関も増えていきますので、さらに広範囲の連携を本格化できるのではないかと思っています。

落合 連携にあたっては、単なる総合病院というのではなく、得意分野を打ち出すことも重要です。たとえば外科領域ではいま、手術室再開とともに腹腔鏡手術に力を入れることを考えています。「〇〇なら銚子市立病院」というふうには、任せていた

だけの分野をせひ持ちたいものです。あとは白濱理事長が、これまで通りぶれずにリーダーシップを発揮していくこと。私も陰ながらサポートを惜しまないつもりです。

カウントダウンに入った手術室再開療養型病床再開も射程圏内に

白濱 手術室再開は、もう間もなく実現できると思いますが、手術が始まるとよい意味での緊張感が高まり、病院の中は、また一段と活性化する



## 田中 基幹氏

銚子市立病院 副院長

1988年旭川医科大学医学部卒、北海道大学医学部附属病院医員(泌尿器科)。病院勤務の傍ら93年北海道大学大学院に入学し、97年学位取得。同年10月より米国・テキサス州立大学MDアンダーソンがんセンター研究員。2002年から大学講師などを歴任、09年より中外製薬臨床企画推進部長。今年6月より現職。好きな言葉は「努力」。

でしょう。

落合 私自身はいつ再開してもよいように準備ができています。継続的に手術を行っていくためには人員整備が不可欠ですが、まずは外科医1人体制でも再開し、徐々に整えていくような形も可能だと思います。

田中 手術室準備委員会を発足させて再開までの日程を組み、そこに向けて準備を進めていく計画です。何事も「いつかやろう」という意識ではいつまで経っても実現しません。

落合先生のおっしゃる通りに、まずはスタートすること。私の専門の泌尿器科領域にも、腰椎麻酔で行える術式がいくつかありますので、そういうものから着手できればと思います。走りながら揃える、そんな気持ちで取り組んでいます。

白濱 先日は療養型病床再開に向けてマットの搬入を行いました。2011年に急性期病床を再開したときは、再開ぎりぎりになって職員自ら



## 落合 武徳氏

千葉大学医学部名誉教授  
医療法人財団 銚子市立病院再生機構  
理事・非常勤医師

1966年千葉大学医学部卒、67年4月千葉大学大学院入学(第二外科)。アメリカ合衆国とイギリス留学を経て、85年10月千葉大学医学部第二外科講師。91年10月同助教授。98年10月同教授(現在の千葉大学大学院医学研究院先端応用外科学)。2007年3月定年により退職。専門領域は消化器外科、臓器移植外科、がん免疫療法、がん遺伝子治療、拒絶反応抑制法などで、先進医療のバイオニアとして新領域を開拓してきた。

銚子市立病院の  
新たなシンボルマークが誕生!



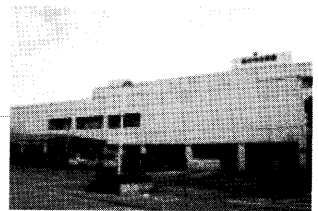
銚子市立病院

Choshi Municipal Hospital

銚子の美しい海、そこから上る太陽

地域医療再生、そして銚子に暮らす人々へ安心と健康をお届けするという強い意志が込められています。青い波のイメージで銚子市の「C」を形づくり、あたたかい命をやさしく包み込む人の手や医療の安心感を表現しています。

ひと足早く入職し地域医療の最前線で活躍する医師と、銚子への深い愛着と熱意をもって働くコメディカルが語る、銚子市立病院の魅力とは一。



整形外科

新たに歩みだした病院だからこそ  
科同士の連携がしやすい

は、「地域のつながりの強さは、実際に働いてみて感じるの

だ」と語る。実際には、高年齢患者が通院するには負担が大きい。「この地域には医療拠点が必要だと感じていましたし、そのために再生した病院で、市民のために働きたいと思ったのです」と語る。

「地域は、一人ひとりの患者さんにしつかり向き合っていて、丁寧な診療ができます」。看護師も、患者や家族に積極的に声をかけ、パーソナルな対応で、より前向きな受診ができるようサポートしている。

「科は順次、再開していきますが、一緒に作ってほしいからこそ、お互いに柔軟な対応ができています。そうした仲間がさらに増えてくれたら嬉しいですね」。

小川 和人氏 整形外科

1991年藤田保健衛生大学医学部卒。東京医科大学病院入局、新潟大学大学院を経て社会福祉法人徳和会創設。



小川氏とナースのみなさん。

整形外科専門医、介護福祉士、介護支援専門員、社会福祉主事などの資格も持つ小川和人は、「地域の医療と福祉の連携がしたい」という思いから、2011年4月に銚子市立病院に入職した。千葉市在住の小川氏は、医療過疎と高齢化が進行しつつある千葉県の実情を実感していたのだ。特に銚子周辺は、大きな病院は隣町にしかない状態で、高年齢患者が通院するには負担が大きい。「この地域には医療拠点が必要だと感じていま

と家族を大切にしている地域性だ」と語る。小川氏はこれまで大学病院勤務のほか、介護現場の医療にも携わってきたが、「銚子ほど、高齢の患者さんにご家族が付き添って来院なさるところはありません。それだけ熱心に受診してくれるので、やりがいがありますし、私たちも一人ひとりの患者さんにしつかり向き合っていて、丁寧な診療ができます」。看護師も、患者や家族に積極的に声をかけ、パーソナルな対応で、より前向きな受診ができるようサポートしている。

患者との円滑なコミュニケーションで  
健康意識を高めていきたい

看護部

病棟を受け持つ五十嵐京子さんは、閉鎖当日まで以前の

「若い看護師も必要に応じて研修に出し、より質の高い看護業務ができるように、成長をサポートしていきたいと思っています」。

らうれいなんです」（一回）。

「職員も熱意をもってやっています。一緒に地域を盛り上げ、継続した地域医療をやってください」。



若海ミツエ看護部長(中央)と五十嵐京子病棟室長(左)、内科外来の田山智子さん(右)。

病棟の再開以来、診療科が増えるたびに、対応できるだけのナースの補充が必要とされてきたのが看護部だ。さぞかし大変な思いをされたものと思いきや、「地元を中心に医療圏内からの看護師募集への問い合わせは多く、異動ゾーンは毎日面接をするほどでした」と若海ミツエ看護部長。その結果、正看護師を中心に、年齢もキャリアもバランスよく人が集まった。今後は「若い看護師も必要に応じて研修に出し、より質の高い看護業務ができるように、成長をサポートしていきたいと思っています」。

「職員も熱意をもってやっています。一緒に地域を盛り上げ、継続した地域医療をやってください」。



